

の人骨を拾い集める仕事を、真和志村民がしたのであった。その納骨作業によって「魂魂の塔」や「姫百合の塔」や「健児の塔」が作られたのであった。

真和志村民が自分の村に近づくまでには、何度か移動を余儀なくされて次第に近づいたのであったが、そのための、住宅設営のための工務班や農耕班を先遣隊として出したこともさることながら、共同体の力を面目躍如と示したのは、なんといつても侵略者から自衛した集団的な動きであった。それは、廢墟の中をさらに強暴に陵辱した米軍の婦女暴行事件に対し、方々に酸素ボンベ等を吊してそれを叩いて警報し、米軍を追い払ったということだ。そのことが簡単な説明で語られているのである。

なお真和志の約半分の面積は現在、軍用地であり、銘苅は米軍家族の住宅地となっていて、銘苅の住民の手に戻っていない。だから銘苅出身者は、現在もお自分の部落を占領されたままであり、宇与儀や寄宮や古島や真嘉比に、旧銘苅住民は散在しているということがある。

普久原 ウシ(三十五歳) 家事
泉水 マツ(五十四歳) 農業

普久原ウシ うちなんかの、とうちゃん(夫)は、昭和二十年の一月に、召集されて、首里の石部隊に入隊して、うちなんかは、もう県外疎開ができなかったから、国頭疎開しようと思っていたけど、結局それでもできなかった。敵がすぐ近くまで攻めてくるまで、

ままになって……。銘苅の若い娘たちは、みんな兵隊さんたちの加勢しに出て行って……。それきりなのよ。

まだ砲弾がとんでこない頃から、兵隊さんたちは死ぬ覚悟だったように、だから普久原の息子たち、警察のヤッチー(長兄朝章)もときたまきて、朝真、朝徳、みんな毎晩蛇味線(サンシン)をひいて、隊長さんも一緒に遊んで、遊んでいたよ。もう今度の戦争はね、笑って死ぬ方がよいよ、と言ってね。毎晩、酒ぐわ(泡盛)を飲んで、歌を勝負して歌って、サンシンをかきながら宴会だったよ。ウンチュウぐわ(叔父さん)はいつも歌を歌ってね。……もう仕方がない、日ごとに、いくさは烈しくなるばかりだったから……。

普久原ウシ 銘苅には、砲弾が烈しくってね。うちなんかね、墓場にいるときよ、出かけて行って、おうちから鍋を持ち出して、墓場でごはんを炊いて食べるつもりで、持って歩いていたら、すぐ艦砲がとんできて、ちようど鍋の中に大きな石が落ちてね、一ぺんに穴があいてしまっただけ、その鍋は使えなくなっちゃったよ。墓の中にいても、蓋してある石は頑丈だからどうもなかったけど、爆風がね、ふわふわと強く吹きこんできて、大変よ。暴風よりもっとこわいよ。それでも、食べものには、銘苅は作物が割に豊富だったし、心配はなかったさ。

泉水マツ 昭和二十年の四月二十八日には、銘苅の部落は空襲でぜんぶ焼けてしまっただけ、何もかも無くなってね。住民はみんな壕に入っていたよ。

普久原ウシ どんどん艦砲が烈しくなってきたよ。五月五日に銘苅から立退きして逃げたすまでは、うちなんかは、最初は普久原の屋敷

自分の部落にいたのよ。

おじいさん(義兄・普久原朝佐)の家には、本家で家も大きかったから、石部隊の隊長さんがいらっしやう。おじいさんの長男の朝章兄さんは、警察の部長をしていたから家には居なかったけど、次男の朝真は、満洲事変から帰ってきて後は県庁に勤めて兵隊にもとられずに家にいたし、三男の朝宣も防衛隊にとられるまでは家にいたし、おじいさんの家は偉い軍人さんたちと一緒に男ばかりだったさ。おじいさんも娘たちも県外疎開していたから……。

泉水マツ 普久原のタンメー(おじいさん・普久原朝佐)の家には、昭和十九年までは武部隊の隊長さんがいらっしやう。五十近い江田隊長とおっしやう。

最初、銘苅の部落には、七百名あまりの武部隊の兵隊さんたちが、小椽から銘苅にきて駐屯して、小学校や各民家にも分宿していたよ。炊事軍曹やら兵隊さんたちが、私の家に来て、それだけの炊事をしていったよ。

それで私の家の、メーヌ家(離れ)に、軍の雑詰やら米やらいろいろと沢山の品物を詰めてあったよ。それから、新しい正月(昭和二十年)には、武部隊はフィリピンに行くといって出発したのよ。ところがフィリピンには行けなくて、台湾に行ったそうで、それでの兵隊さんたちはみんな凄いわけよ。後から銘苅にきた石部隊こそが、全滅したのよ。

石部隊は何百名だったか、ほとんど安里小学校に入っていたけれど、私の一人娘(十八歳)のカミちゃんは、石部隊の看護婦として勤めたけど、ずっと後までも兵隊さんたちと一緒に、とうとうその

前の横穴式の掘った壕に入っていたけど、どんどん烈しくなったので、おじいさんの家の墓に入っておったさ。

泉水マツ 私もフクバル(普久原)の墓に入っていたよ。ジージ(厨子)を出して、食べものは、それほど不自由なかったよ。兵隊さんは食糧はぜんぶ持って行ききれないで残っていたし、それから銘苅は首里の土族の流れの農村で、割合豊かな農家が多かったから、食糧は沢山あったよ。銘苅を追われてからこそ、もう苦労のしどうし……。壕(墓)に運んであった道具や食糧の、ほとんど何もかもうち捨てて、逃げて行ったのだから……。

普久原ウシ ねえ、銘苅の石部隊はね、浦添の戦い、安波茶・仲間間の戦いでよ、みんな死んでしまっただけの中からたった一人しか生き残って帰ってこなかったよ。石部隊の兵隊さんは、二、三百人はいたと思うけど、毎晩、斬り込み隊を出して、出かけて行ってね。最後には、たった一人だけ、若い兵隊が帰ってきて、自分一人生き残ったと話していたよ。

泉水マツ そう、銘苅の友軍は、たびたび浦添(ウラシ)の戦いに出て、ときどき怪我人も帰ってきていたけど、あとではみんな全滅してしまっただけ……。夜の間、戦いに行くんだが、……昼は壕にとじこもって、……昼は飛行機や砲弾がクッナイ(轟音の形容詞)して、とてもかなわなんだもん。

うちのカミちゃんは、南風原の陸軍野戦病院に行っていたが、職名の怪我人の兵隊さんたちと一緒に、全滅だよ。逃げてこれないこともなかったらうけど、逃げて来れないで……。

普久原ウシ 石部隊がいなくなっただけから、五月五日に、立退きす

るとき、敵は屋富祖(旧浦添村)まできていたよ。戦車から火花が出るのを、うちなんか見たよ。その夜、ちょうど、うちなんかのとうちゃん、部隊から離れてきていたけれど、どうせこの戦はね、死ぬか生きるかの一つだから、もし戦が勝った場合は、わしがお前たちと一緒に逃げたら、大変だから、お前たちは逃げられるだけ逃げるんだよ、と言って別れたのよ。

泉水マツ 五月五日は、ミーヤーのアーヤ(普久原家の分家・叔母さん)とミーヤーの娘の信ちゃん、ウサぐわ叔母さん(普久原ウシ)の家族、朝真、それからカズ姉さん夫婦と子供たち、カズ姉さんの主人は巡查で知念・玉城の出身だったから、そっちの方に逃げて行くつもりで、島尻に向かったのよ。

逃げて行くとき、あわててもいたし、とても連れて行けそうもなかったが……親戚のうち三名は残して、見殺ししたようなことになって、ミーヤーの息子ね、頭が切れすぎて、癪癪もちみたいになつていた一中の朝輝さん、普久原のウフタンメ(祖父)の妾さんだった東のお婆さん、与儀のお爺さん、この三名はね、自分では遠い道程は歩けそうもないからといって、墓場においてきたんだが……戦争が終つてから探しに行ったら、墓場で骨魂になつてしまつていたよ。

私はね、道案内してくれたカズ姉さん夫婦の後に従って歩いて、まっすぐ玉城に行ったよ。砲弾が落ちたら、すぐ這ったりすくんだりして、夜中歩いて、夜が明けても歩いて、やっと玉城について、カズ姉さんの主人のシマ(部落)の山の中に隠れていたんだよ。玉城に行く途中、明るくなってから、私たちが砲弾に追われなが

きて、死人をウクル(埋葬する)ものもいたし、そのまま放つたらかしくしてあるのもあったよ。

それから壕の近くに捨てられた年寄りたちが、三、四名、這つてくるものや、ぼんやり坐っているものもいたよ。

富里から玉城に行ったんだが、その間の道々には、どれだけ沢山の死人が転がっていたことか！数えきれないほどだったよ。艦砲もクラナイ(轟音の形容詞)して、弾が近くに落ちると、すぐ土の中に放り込まれてね、身体中まったく土を被ってしまつてね、土の中から這い出し、這い出して、逃げて行ったのよ。こんなにしても生きられるかと思っていたのに、凄いで、生きてきたんだからね。

富里の壕から出て行った朝真と女子青年団の娘たちは、それきりまたと逢えなくなつてしまつたよ。カズ姉さんたちとも別れ別れになつてね。

普久原ウシ 朝真兄さんはね、まだ二十六、七歳の若さだったけれど、県庁からの仕事で疎開者の指導をしていたので召集をまぬかれていたからね。うちの子供をつれて、朝二の手を引いてくれて、私は光ちゃん(次女・一歳)をおんぶして、長女(十二歳)も長男(七歳)も従って歩いて、ミーヤーのアーヤたちも一緒に、島尻の玉城・富里まで行つてね、そこで別れるまではずっと一緒だったよ。その後、別れて、どうなったか、島尻のどこかで、戦死したんだろうけれど……

普久原のおじいさんは、県外疎開から昭和二十一年の夏に、引揚げてきたとき、朝章ヤッチーも朝真兄さんも朝宣も、息子たちがみ

ら歩いているとき、女の人が走って行きながら、破片でおぶっている子供の首がはねとばされて、それも知らずにその女の人が走っているのを、私は見たよ。アキサミヨナー(感嘆詞)言葉にもならないよ。また兵隊さんがね、電信柱に叩きつけられてね、貼り付けられたまま、生きたみたいに立って死んでいたよ。

ウサぐわたちは銘苅を出るときは一緒だったけど、私たちに従ってこれなくてね、途中から引返したのか、壺川の墓をあけて、入っていたそうだよ。だからウサぐわもアーヤも、私たちがより一週間も遅れて、玉城に探してきて、また一緒になったんだよ。

それからまた大変だった、食糧難でね。最初は玉城の富里の壕に入つて避難していたんだが、ちょうど銘苅の女子青年団の娘たちが追われてきていたから、その娘たちを兵隊さんたちの世話役に出して、そして食糧も貰つてしばらくそこで暮らしていたんだが……

また砲弾がどんどんとんできて……そこにもおれなくなつて……。玉城の富里の茅葺家に二十名余り避難しているときだったけど、雨も降るけど、こんな小さい家にこんなに沢山の人がガヤガヤしている、ウカアサヌムン(危険だもん)と思つて、私たちだけその家から出てすぐ後だよ、出て行つて近くの壕につくと同時に、その茅葺家は直撃を受けてね、パンと物音がして、それだけの人はみんな死んでしまつていたよ、二十名余り。艦砲が一発おちて死んでしまつているそれだけの死体を、私はあとで見ただけ並べたみたい転がって死んでいる群れは、もう見られたもんじゃなかったよ。それでも、近くにいた死人の親戚や知り合いの人たちが出て

んな死んでしまつているのを知つて、落胆してね。また、おじいさんの弟たち、ミーヤーの叔父さんね、うちのとうちゃん(夫)も、男はみんななくなつていたもんだから、銘苅の普久原一家は、女子供だけが生き残つていると言つて嘆いておられたよ。

五月五日の晩にね、うちのとうちゃんが、今は玉城村あたりが安全だから、あっちの方へ行きなさい、とも言つていたし、またカズ姉さんの主人が玉城出身だったから、ちょうどよいということになつて、カズ姉さん夫婦を先頭にしてね、ミーヤーのアーヤも娘の信子も、泉水ぐわのンメーも、朝真兄さんも、それから子供たちもみんな一緒に、暗くなつてからぞろぞろ逃げて行つたわけさ。

そして園場にさしかかつたらね、そこは、西海岸からも東海岸からも艦砲射撃されてね。もう人が入り乱れて、ワッサイワッサイ(群集がもみ合つて舞めく形容詞)して、そのときはもうあっちこち燃えていて、豚も山羊も人間もわあわあわあして、兵隊さんもあっちに行こうかどっちに行こうか右往左往して迷つてね。うちなんかは、カズ姉さんたちを見失つてからに、朝真兄さんが玉城に行く道は知っているとやうに言っていたもんだから、朝真兄さんについて歩いて……。そのときには、ミーヤーのアーヤはうちなんかにくつついていたけど、泉水ぐわのンメー(泉水マツ)なんかはカズ姉さんたちと先になつて行つてもうて、別々になつてしまつていたさ。

朝真兄さんは、道は判るわかるしてはいたけど、実際には判らんさ。歩いて行つたら、もう戦場に入りこんで、弾はどんどんくるし、モウ(野原)ぐわの側の崖にちこまつて隠れたりして、そ

れから一応は引返して、壺川にヨシ姉さん（ミーヤーの長女）たちの壕があるからそっちに行こうということになって、ミーヤーのアーヤがつれて行ってくれたのさ。だけど、その壺川の壕は、知らない人たちがすでにいっぱい入っていて、はいれないもんだから、どうしよう迷って、荷物はそこに置いたままで、墓を探し歩いてね。そして近くの神墓とか言われている墓を見つけて、恐れられて開けられてなかったから、朝真兄さんがあけてからに、うちはまた荷物を取りに一生懸命に走って行って取ってきて、その墓に入っていたさ。うちの初ちゃん（長女）は足を破片で怪我していたもんだから、その手当てをしながら、その墓に六日間も入っていたさ。弾が烈しくて、出られなくて。ミーヤーのアーヤたち二人、朝真兄さん、内間の姉さん、うちの家族五人、それだけは一緒だったさ。六日目に、ここは危険だから早く立退きなさいよ、という声がかかって、朝真兄さんが、みんなが行ってしまわないうちに行かないと、ここに残されたら死んでしまふよ、とせきたてるもんだから、急いで出たんだけど、道がよく判らなくてね。

それから朝真兄さんは、若い青年が民間人と一緒に歩いていると、友軍の兵隊さんからスパイと怪しまれて殺されるかもしれないと思っ、内心びくびくしていたさ。

道が判らなくてね、今から思うと、長堂の部落に入って行ったさ。そしたら、友軍の集まっているところにぶつかって、少し後戻りしてから、ぼくが行くとまずいから叔母さんが行って道をきいてきて下さい、と朝真兄さんがいうもんだから、うちが行って見たさ。うちは光ちゃんをおんぶしていたから、大丈夫だと思っ

玉城・富里の壕には、第一線から戻ってきた怪我している兵隊さんが五、六人入っていたもんだから、うちは兵隊さんに追い返される前に言ったさ。兵隊さんたちはこんなにして怪我なまってるようだけど、前はこっちは兵隊さんたちの壕だったんですか、そうだよ、そんならうちなんかはこっちから引越さなければいけないですね、と言ったら、小母さんなんかはそんなに子供さんが沢山いるからここにおきなさい、ぼくたちは下の壕を使うから、と言っ

てくれてね。だから、うちはまた、壕については仕事もない暇だからね、そんならね兵隊さん、兵隊さんたちはそんなに怪我してもし、自分ではご飯もよく炊いては食べられないでしょうし、洗濯もできないでしょうから、うちなんかがお世話するから、この壕に入れて下さいね、と言ったさ。

そのうちに、石部隊の弾運びにとられていた銘苅出身の女子青年の女の子たち五人がきたから、その子たちに食べさせる食糧まではうちなんか持つてないでしょ、だから兵隊さんたちの所へ行って行ったさ。兵隊さんたちは食べものは、充分にあったさ。第一線に行くときにその区長さんに預けてあったらしく、当分食べものは沢山あります。と言っ

ておったさ。だからうちなんかは、兵隊さんたちのお米は玄米だったから、そのお米を搗いて炊いて下さい、とよく頼まれていたから、ちようどいいと思っ

てうちは女の子の五人のうち三人はその兵隊さんたちに紹介して、お世話させるよう頼んで、またあとの二人は上の方の壕につれて行ってよ、兵隊さんこの子たちはうちの同じ部落の娘さんたちだからね、遠慮なく炊事洗濯やら何やらをさせて手伝わさせて下さい、と頼んださね。

けど、そしたら、すぐ兵隊さんが、あんたは何しにきたか、というもんだから、うちなんかは玉城村に避難しにすがね、道が判らんでこっちに入りこんでしまったが、道を教えて下さい、するとんで玉城村に行く道はあつちなのにな、こんな反対方向に入りこんでるか、と言っ

てものごく怒られてからにね。すみません、そんなら自分で探して行きますから、と引返して、うちは朝真兄さんに、大変な怒られたよ、と言っ

てそこから逃げたさ。それからみんなぞろぞろあてもなく歩いて、仕方なく民家の薪小屋の中でその晩はすごしたよ。

そして少し夜が明けてきたから、もとの道に戻って、人に訊いたりしてどんどん歩いて玉城村に行っ

たさ。隠れたりしながら、歩いたけれど、ときにはトンボ飛行機ぐわ（米軍偵察機）に追われてね。やっこの思いで船越まで来たとき、目の前の民家に、すぐ艦砲射撃の弾が落ちてね。その家も畑も燃えてね。うちの長男の朝信は、ズボンを二枚も履かしてあつたけど、右腿を大きく火傷しておったよ。それでも夢中で逃げたので、玉城にたどりついてから、うちの朝信は自分の火傷に気がついたら、どん

なににあわてていたか、それから一軒の空家があつたもんだから、その家に隠れて、生ま芋をみんな分けて食べて、日が暮れてから、玉城村の富里に行っ

たのよ。玉城村の富里の近くの山道を歩いたらね、偶然にも泉水ぐわのンメーたちと出会っ

てね。ちようどンメーたちと一週間離ればなれになっていたわけさ。それからカズ姉さんたちも一緒にね、近くの友軍の壕に入れて貰ったさ。

朝は、アメリカの飛行機はあまり音もしないで、ゆっくりゆっくりきて、偵察して、人の動きを見ると無線ですぐ連絡してね、弾が落ちるようにするから、あのトンボぐわね、あれが出てこないうちに朝早く、うちなんかは畑に出かけて甘藷を掘ったり野菜を集めて持つてきて、そんなのを炊いて食べていたよ。でも兵隊さんたちは、あまり食べもしないうちに、間もなくそこから立退きよ。杖をついてね、やっ

と歩く兵隊さんもあるし、頭をくびって歩く兵隊さんもあるし、その五、六人の兵隊さんたちは、壕をすてて、どこかへ行ってしまつたよ。

それからじきに艦砲射撃がどん

どん飛んできてね。近くの民家が、艦砲の直撃を受けて、家の中に隠れていた人たちみんなは、一べんに亡くなつてしまつてね。また、うちなんかは、兵隊さんと一緒に船越まで弾運びにも一度は行つたよ。今から思うと日本の兵隊さんたちは死を覚悟していたでしょうね。うちなんかは、そのときはもう生きる気持でない、何もこわくないさ。弾運びにも行つたけれど、友軍はどん

どん艦砲でやられてね、みんなばらばらに撤退することになつてね。兵隊さんたちがいなくなると、すぐ近くまでアメリカが攻めてきてね。もうそこにもおれなくなつて、うちんか山の中に逃げ

てね。もう大変だったよ。その頃は、よく雨が降るしね。食糧は持つてないし、行くところもないし、た

だもう山の中にみんな雨に濡れて立ってね。夜になったら、山から出て

もとの壕に戻ってからに、兵隊さんたちが残した食べ物を食べてね。それからまた山の中に入って、ずっと隠れて、夜になつたらまた壕に戻って、……こんなこんなして同じことを繰

り返して、三日三晩すごしたのよ。

そしたら、とうとう朝真兄さんがね、その夜、友達や銘苅出身の娘たちをつれて、自分たちはもつと南の方へ行ってみるから叔母さんたちはこっちにおいておきなさい、こっちは逃げなさんなよ、いい壕を探したら必ず連れにくるから、でなくても誰か連絡させるから、と言いたさ。

その頃の玉城・富里は、逃げて行く人たちでごった返していたけど、ワッサイワッサイしてどこへ逃げていいのかみんな迷っていたさ。朝真兄さんたちは急いで行ってしまっって、うちなんかは逃げるのを諦めて、仕方なしに壕の中にいたさ。一日して、二日目に、あのじようアメリカがきて、それをすぐ感じたさ。指笛もファイフイ鳴らして犬もワンワン吠えてね、壕の上からどんどん歩いてる物音が聞こえるのよ。こっちにきているよ、もう大変さ。出て行くのもこわかったけど、そんな井戸の底みたいなどころにいるのもこわくて、夜になってから、一人ずつ手を引っ張って、みんな壕から出てみたさ。アメリカはいない、だけどもう食糧はぜんぜんないし、誰もいないし、うちなんかばかりだったよ。

上の方には、あっちこっちに壕があったけど、その壕の入口には、年寄りだけが残されていて、みんな逃げて行った後だったさ。そこは玉城村の喜良原の山の中で、水もなくてね、何も食べるものもないから子供たちはワアワア泣いてよ。三日間、飲まず食わずでいたさ。そのとき一緒だったのは、ミーヤのアーと信子、泉水ぐわのンメー、うちの家族五人、それに南風原出身の知らない小母さんも一緒だったさ。

ようにして、穴の底までおりて、ちよんちよん平が落ちる水を溜めて持ち運んだんだが……。

普久原ウシ 喜良原の山の中を歩いているときね、他所の姉さんがね、うちが光ちゃんをおんぶしているのを見てね、こう言っ泣いたさ。アイナー（感嘆詞）小母さん、あんたは童もつれてきているのね、私は壕に置いてきたんだが、どうすればいいんでしょ？アメリカがきたもんだから、びっくりして、その姉さんは壕から逃げたらしいけれど、後になってみるとその壕がどこだったのか、よその土地だからどこがどこだか判らないで助けに行くこともできないで、苦しんでいたよ。

また、木の下にね、お婆さんが臥かされていてね、捨てられたままになっていて、ドウニイして（唸って）いたよ。

喜良原の山の中に隠れているときにね、泉水ぐわのンメーの知っている兄さん（青年）が歩いてきたから、ンメーが、アイ、シンハチー（名前）と呼んだら、その兄さんは、あんたたちはなんでこんなところでアワレ（苦勞）しているの、山の下の方には水もあるのに、下の武部隊の壕だった穴の底には、水も食糧もあるのに、と言っ、ほんとに助かる思いがしてね。

それで夜になってから、豚油を皿に入れて灯りの準備をして、鍋を持って、うちとンメーはその兄さんに従って行ってね。水を汲んできたけど、子供たちがすぐ飲んでしまったさ。水のあるところは、険しいところだったから、自分たちだけでまた行って道に迷いそうだったから、もう諦めてね。

そしたらシンハチー兄さんが翌日また来たさ。その兄さんはうち

泉水マツ 富里にいるとき、一度はみんな死のうという話があったよ。カズ姉さんの主人が持っていた手榴弾が一個あってね、壕の前にみんな坐って、朝真兄さんが話をしたね。この際みんな死んだ方がましじゃないかと、協議したけど、これ一つではみんな一緒には死なないはずよ、ということになって、兎に角、いまは死なないで逃げるだけは逃げてみようということになってね。

その後で、カズ姉さんたちは自分たち家族だけで出かけて行って、上の子供二人は捕虜になってから死んだそうだけど、戦では死なないで助かって、朝真兄さんたちは女子青年の女の子たちと一緒に逃げて、どこでどうなったのか、それきりいなくなっ……。

私たちも富里から喜良原に行くときは、助かるとは思ってもみなかったが……。

また、喜良原ではただもう水が欲しくて、喉が渴いてね。

普久原ウシ 喜良原の丘からは真下に海が見えて、そこにきたら、うちの朝二（次男）が水欲しさに、海の水を飲みに行こうとして泣きついてね。

泉水マツ そう、ウス水（潮水）を見て、飲みに行こう行こうして、引き止めても、また走って行こうとしてね。

普久原ウシ うちなんか、カーサムーチーに使うサンニンの実を茎から抜くと、そのつけ根に露ほどの一寸ぐわ汁がついているのを、子供たちに舐めさせたのよ。

泉水マツ 朝二は、親ヶ原の壕の底に水を汲みに行ってやっと持ってきた水を、全部うち飲んでしまっってね。そこに行くには、苦勞して、皿ぐわに豚油を燃やして、その灯りを頼りに地の底まで下る

に、友軍が残した食糧があるから探しに行こう行こうしてしきりに誘うし、ンメーは行きなさいとすめるので、うちは行くつもりになっていたんだけど、考えてみたら、アメリカは捕虜をとるというし、殺されるかもしれない、また知らない兄さんを信用もできない、なんだか行ったら帰ってこないような気がして、この子供たちはどうなるかと思っ、ンメーに言うたさ。うちは行かんよ、なんでとンメーが訊くもんだから、だっってンメー、あの兄さんがもし嘘をついてからに、どこかに帰れないところに連れて行ったら、ンメーもこの子たちをかかえて大変苦勞するよ、と言ったさ。それで、ああそうだね、そんな行きなさんな、これだけは死んでも生きても一緒の方がいいよ、ということになって、ただぼんやり山奥に入っっていたさ。もう弾も落ちてこなくなっっていたさ。

山の中にいたら、昼、人がときどき通るさ。男も女も、一人ずつ、逃げている様子でもなく、のんびりときどき通るもんだから、うちは呼びとめてみたさ。兄さん、戦はどんなになってるかね。と訊いたら、小母さんたちは馬鹿だよ、なんでそんなところに死ぬ思いして隠れているね、早く出なさい、戦はもう負けているからね、もう勝つ見込みはないから、堂々と手を上げて出なさい、と言ったさ。

それで、うちはンメーたちに相談するつもりで、あの兄さんがそういうけれど、出て行こうかと言ったらね、ンメーもアーも、もう怒っってね。あんたは行くなら行きなさい、絶対に日本は戦争には負けないからよ、私たちは出ない、銘苅から兵隊に行っている人たちにもすまない、なんでこんなに今まで苦勞してきたね、あんた一

人行くなら行きなさい、と叱られたさ。今まで一緒に苦労して生きてきたからにはね、死んでも生きてもみんな一緒だからと思って、うちも一人で出て行く気にもなれずに、そんならうちも出て行かないさ、と言うて諦めてね。

そしたら、その翌日も、人がどんどん通って行くもんだから、また訊いてみたらね、なんでこんなところに坐っているね、手を上げて出た方がいいよ、私たちはどうに捕虜になって食糧探しにこうして歩いてるんだよ、と言うたさ。うちは、もうその通りだと思っただけだけれど、ンメーたちが絶対に出来ないと言張るもんだから、出ないことにしたよ。

そしたらね、ンメーがね、このへんにはもう食べるものもないし、ここで死ぬよりは自分の部落で死んだ方がまだだから、兎に角どんどん北に向かって歩いて行くから、みんな準備しなさいよ、しからにね。出発してね。歩いて行ったら、幾つも電線が通り路に張られてあるところがあつてね、それをぐり抜けてね、夜通し歩いてね。

南風原の小母さんも一緒だったけど、その小母さんも道が判らないで、ただ無鉄砲に山奥から出て、田圃の中も畑の中も歩いて、やっとならぬ路に出て、歩いてね。もうどうなってもいいと思っただけをどう歩いているのかも判らないで……。

うちなんか、おんぶしている光ちゃんに、ズキン代りに着物を頭から被せて、咳するとアメリカンにつかまると思っただけとき塩を舐めさせたりしてね。歩いて行ったら、民家らしい灯りが見えてきたさ、その灯りを頼りにそこへ行ってみたら、民家から男の人が出

ばにつれて行かれてね。またそこに坐んなさいと合図されて、とうとうそこに夜が明けるまで坐っていたさ。アメリカの兵隊さんは、横に銃を持ってずっと見守っていたさ。

ンメーはね、もうしよっちゅうこんなこんなにして、仏様に拝むように合掌して頭を繰り返して、アメリカに沖繩口(沖繩方言)で、私たちが帰して下さい帰して下さい、自分のシマ(部落)に帰して下さい、と言うていたさ、それでもアメリカは黙っているものだから、ンメーはアヤーとうちに、初ちゃんと信子はアメリカに上げて犠牲にさせなさいね、と言っただけ、それからアメリカに、この二人の娘を洗濯させたりして使っただけ、置いて行くからね、残りは帰して下さい、私たちは自分で食糧を探すから、シマに行って畑のものを食べるから、帰して下さい、と言っただけ、アメリカは「シニリカナハカ」とはっきり日本語で訊いていたよ。

それでもアメリカは帰そうとはしないもんだから、ンメーは手真似してね、食べることは自分たちです。心配ない、と言って鍋まで出して見せて、帰してくれれば、これでイモを炊いて食べるから……と一生懸命におねがしたんだけどよ、アメリカは黙っていたさ。

夜が明けたらね、アメリカの兵隊さんたちは集まってきて、みんな笑ってね。うちなんかも、顔を洗ったこともないし、泥だらけになつてみんな真黒くなつていて、ボロみたいな小さい荷物も汚れてなんの役にも立たないものばかりだったし、その上ンメーがしよっちゅう手を合わせて拝むしね。兵隊さんたちは笑ってからに、近

てきてね、なんでこっちに来るね、と怒られて追い返されてね。また歩いていたら、もう一軒、灯りぐわのある家があったから、尋ねてみたらね、男の人が出てきて、大変、こんな夜中から来て、見つけたら米軍にこっちまで殺されるから、早く行きなさい、あつちの方に行きなさい、と言うたさ。もうみんな歩き疲れているから、一晩だけ泊めて下さい、と頼んだらね、こっちも食べものがないで、米軍の洗濯ぐわをして、食糧を貰って食べているのに、今に大変なことになる、ほんとに米軍に見つかつたら殺されるよ、早く行きなさい、とまた追い返されてね。

足がしびれるくらい疲れてもいたのによ、とにかく自分の部落までは夜が明けるまでに行こうということになって、歩いて行ったらね、気がつかないうちに南風原の米軍の陣地の中に入りこんでいたさ。

うちなんかは歩きながら、アメリカと会ってみたいと判らんけど、殺されるかどうか判らんけど、一応はみんな手を挙げなさいよ、と話してあつたさ。ンメーとアヤーは先頭になつていたので、すぐ目の前に大砲が見えたもんだから、びっくりして手を挙げて、坐つたさ。うちなんかも手を挙げて、坐つたらね、アメリカの兵隊さんがワサワサ出てきてね。うちなんかに銃を向けて、懐中電灯で照らしてよ。横にも前にも後にも、そのアメリカたちが取り囲んでからに、三十分間ぐらい見張つてね、うちなんかを釘付けにしてね。ガヤガヤ何か喋っていたさ。

それから一人のアメリカの兵隊さんが手真似してね、立ちなさいと合図して、うちなんか立たされて、少し奥の方の大砲のない広

くの畑からキャベツの小さいのを持ってきてね、うちなんかに投げて、食べなさい、と言うのよ。

そしたらミーヤーのアヤーが怒って、手真似して、切って煮ないと食べないよ、と言うたもんだからね、するとアメリカはすぐナイフを持ってきて、キャベツもイモも切つて食べなさいと、うちに渡したのよ。

朝になって、戦車がきてね、うちなんかアメリカに戦車に乗るように合図されて、うちはどうしようかと迷っていたら、ンメーもアヤーも殺されると思っただけで泣いてね。それでもアメリカが乗れ乗れするもんだから、ンメーたちは戦車には絶対に乗らないと頑張つたけど、うちの朝信がね、無邪気に喜んで「ああよかった、戦車に乗れる」と言ったら、それを聞いてンメーもイヒと笑つてね、とうとう戦車に乗つたのよ。そしてそんなに遠くない所までつれられて行つて、南風原の米軍本部の中の、小さい金網の中にうちなんかは入れられたさ。

そこは八畳ぐらいの細長い金網の囲いで、うちなんかだけしか入ってなかつたよ。うちは怒つてね。なんでこんな扱いするかと思つてね。そこにはアメリカは近寄つてこないで、朝鮮人や二世がきていたさ。だからうちはね、朝鮮人や二世に向かって、なんでこんな金網の中に入れるね、どうするつもりね、あんなたちみたいなスパイがいるから戦争に敗けるさ、と怒鳴つてやつたさ。そうしたら朝鮮人たちは小馬鹿にして笑っていたのが急に態度を変えてね、水罐に水を入れてきて飲ませたり、お菓子やら罐詰を持ってきて食べさせたりして、よくしてくれたさ。おしっこするときには、うち

なんかは囲って見えないようなところでないとしないよ、と頑張っ
て、金網の外に一寸だけ出して貰ったさ。

それからその日の夕方に、トラックで運ばれてね、玉城の手前の
畑の広っぱにつれて行かれてね、驚いたことに、そこには沢山の捕
虜が集められていたさ。テントにも入りきれないで沢山の人たちが
テントの周りにあふれて、坐ったり横になったりしていたよ。そこ
についたら、おにぎりが一つずつあてがわれてね。その翌日はね、
玉城に行くように言われて、うちなんか歩いて行って、そこに棲め
るかと思っただけ、そこも捕虜がいっぱいで、それからは自分たち
で空いているテントや民家を探さないといけないことになってね。
棲めるようなところを探して歩いていたらね、道にはアメリカ
たちがラジオを鳴らして遊んでいただけ、知念村の久手堅に出て、
やっと役場の建物の一部に入れて貰うことになったよ。

泉水マツ 南風原のアメリカのキャンプの中で捕虜になってか
ら、二、三日してから久手堅に棲みついて、そこではアガク（働
く）だけはアガいたよ。配給はほんの少ししかなかったから、アガ
けば、食糧は畑にいくらでもあったから沢山手に入ったよ。私は当
時、まだ五十四歳で、元氣者だったから、人一倍アガいて、イモ、
シブイ、チンクラーなどを集めて、カミテ（頭に乗せて）きてね、
子供たちにも食べさせてやったよ。死人が肥やしになったのか、豊
作だったよ。

私は一人だったし、一人娘のカミちゃんは立派にお国のために戦
死したと諦めていたよ。

私は戦争前ずっと以前に、夫を亡くしていたから、家族はカミち

て歩くのが、せいっぱいだったんだよ。

ミーヤーのヨシ子姉さんはね、私たちが捕虜になってから、久手
堅にいたときに、探して尋ねてきていたけど、子供たちも瘦せこけ
てね。長男も次男も、目だけ大きくして肚苦しい（可哀そうな）
もんだったよ。ヨシ子はね、四人の子持ちだったけど、下の二人の
子供は見殺しにしてきたと言って、嘆いていたよ。下の男の子二人
を壕（墓の中）に入れたまま、置いてきたけど、そのまま死んでし
まったと泣いて話していたよ。

ヨシ子は島尻の米須にいたそうだけど、そこから食糧と壕を探し
に出かけるときに、四歳と二歳になる子供を墓の中に入れて、入口
に石を積んで塞いで、あとでつれに来るから待っていなさいと言
きかせて、上の二人の子供を連れて出かけてね、歩いているとき
に、アメリカにつかまってしまったそうだよ。それならね、ヨシ
子はすぐに、墓の中に置いてきた子供たちを連れに行こうとして、
引返そうとしたら、アメリカに引戻されてね。それでもヨシ子は
一生懸命おねがいで、二世がおねがよかったんだが、言葉が通
じないものだから、相手は逃げると思って引張ってね。それでも行
こうとするもんだから、アメリカは殴ろう殴ろうしようたそう
だよ。

だからとうとう助け出すこともできないでね、収容されて、何日
も経ってから連れに行ってみたら、骨魂（こつたま）になっていたそうだよ。
可哀そうに、生きている子供を捨てて、骨になってから、ああ、あ
あ嘆いてみても、もう仕方があるもんかね。

その話を聞いて、ミーヤーのアーはね、落胆してね、それから

ヤんと二人だけだったけど、この戦争で親子別々になって……。カ
ミちゃんと一緒だったら……。でも、一緒だったとしても、あれだ
けの戦火だから、あの娘は死んだかもしれないしね。

あの娘は、友軍の看護婦になって犠牲になってしまったけど、自
分は兵隊と同様だから兵隊とずっと一緒にいるから、もし烈しくな
って行くところがないときは、野戦病院に母さんもいらっしやい、
と言っていたんだが……。

五月五日に、銘苅を立退きするとき、ウンチュグわ（普久原ウシ
の夫）は、普久原の墓場に来ていたよ。そして、荷ぐわをウサぐわ
の頭に乗せてくれてね、ウサぐわも私も、もう一緒に逃げて行くこ
とも言えなくてね。私はカミちゃんの言葉が頭に浮んでね。カミち
やんが、八年間は学校も出してこんなに育てて下さって、感謝し
ています。これからは天皇陛下に精神と肉体をさし上げて、戦死し
に行きます、と言うんだから、私は言う言葉もなかったよ。だから
私はウンチュグわに、天皇陛下の御楯でこそあって、命かぎり働か
なければならぬよ、としか私は言えなかったよ。ウンチュグわ
は、これから爆雷を持って戦車を引っくり返しに行くと言ってい
たけど……。

またウンチュグわは、戦争は必ずまかす（勝つ意）から、それま
では子供たちをどこでも凌がしてくれよ、とも言っていたが……。
ウサぐわのそれだけの子供たちを戦火の中から連れて歩いたのも、
私や朝真兄さんがいたからできたんで……女一人ではとても四人の
子供はつれて歩けなかったよ。

ヨシ子（ミーヤーのアーの長女）の場合は、二人の子供をつれ

間もなく病死してね。またヨシ子も、戦後、ノイローゼみたいにな
って病死するしね。……チムグルシイむんやさ（可哀そうなこと
だよ）……。

普久原ウシ 久手堅からは、主に真和志村出身者だけが集められ
て、米須の近くの伊原に収容されてね。そこにいるとき、うちなん
かの仕事は、遺骨拾いだっただけさ。手で拾い集めて、カマスに入れて
ね。担いで近くの、今の「魂魄の塔」ね、あそこに穴が掘ってあつ
たから、あの中に遺骨を入れたさ。山積みになってね。遺骨は一面
にころがっていて、海岸から、今の「姫百合の塔」の裏、真壁あ
たりまで、拾い集めて歩いたよ。

泉水マツ 久手堅には八か月ほどいたと思うね。捕虜になったの
が昭和二十年の六月中旬だったから……。翌年の一月末には、真和
志村民だけ移動させられてね。移動させられたところは摩文仁村だ
った。そこには真和志村民が集結していて、米須を中心に、大渡・
米須・伊原とそのへん一帯はひろびろとした焼野が原で、私たちが
行ったときは、もうテント小屋ができていたよ。五、六千人以上の係
長が決められていて、武器やヤツキョウや空糞やらで、農具や食器
類なども造っていたよ。物物交換したり、集団で仕事したりして
ね。私たちの仕事は、一番の犠牲地だったところから野や山や畑
や道にいくらでも転がっているクチダマ（遺骨）を拾い集めること
だったよ。カシガール袋を背負ってね、毎日毎日、あれだけ沢山の骨
魂を拾い集めてね、今の「魂魄の塔」に納めたんだよ。

米須に四か月ほどいてから、真和志村に移動するという話だった

けど、すぐには真和志村には入れなかったよ。五月に移動したところは、豊見城村の嘉敷だったよ。嘉敷バンタは何もない所だったから、毎日のように遠くまで食糧探しに出かけていたよ。

豊見城村の嘉敷に二か月してから、すぐ近くの真玉橋に移ったね。そのテント小屋には、三か月ほどいたね。そこにいるとき、熊本に疎開していた普久原のタンメー（泉水マツの長兄）たちが、引揚げてきて、入ってきたんだよ。私はその百日間、自分の部落（銘苅）に通って、イモ掘って持ち運んでね。

真和志村へ移動がばじまってから、私たちはずつと遅れて移動したけど、銘苅にすぐには入れずにね、真嘉比（手前の部落）に移住許可がおりてね、そこにも三か月ほどいてから、銘苅に入ったわけだよ。捕虜になってから二年半近く経ってね。

そのころ銘苅では、くろんぼう（黒人）事件がどんなに多かったから……。真玉橋にいるころから、くろんぼうの強姦事件はあったからね。私も何度もくろんぼうに追われてね、大変だったよ。

私たちは、着ているものといったら、男も女も、アメリカの服（米軍の作業服）を着ていたから、カシガール袋には配給用に出すイモを入れて、上着とズボンの大きなポケットには、おいしそうなイモを選んで入れてね、追われたら、そんな恰好で走っていたよ。

普久原ウシ 真玉橋から食糧探しに出て、ついでに銘苅の自分の屋敷を見に行つてね、二人の銘苅出身の人妻が黒人につかまわってね、強姦されたことがあったよ。こわかったよ。天久には米軍のキャンプがあったけど、そこから黒人が遊びに出てきよったさ。うちとンメーもね、一緒に銘苅に出かけて、塩入れるカーミぐわを取り

に行つたときね、三人の黒人に目をつつけられてね。うちはね、くろんぼうと言つたら氣付かれると思つてね、ヤーチニクヤー（家を造る人、転じて黒く穢れる人の意）がいるよ、とンメーに叫んで、大急ぎでどんどん駆け逃げて逃げたことがあったよ。

泉水マツ 私はあのとき池で手足を洗つていたが、ウサぐわが「アイエナー（感嘆詞）ヤーチニクヤー」と言つたもんだから、鉄もイモも放つたらかして、CPのいる所へどんどん走つて逃げたのよ。

実際に目撃したことはないけれど、強姦されたという噂は、しょつちゅう聞いていたよ。

でもね、真嘉比の頃からは、みんな一致協力してね、くろんぼうが出たら、大勢で騒いで追い出していたよ。テント小屋のあつちつちに、酸素ボンベやら大砲のヤツキョウやらがぶらさげてあつて、あれを叩いて警報していたからね。性質の悪いくろんぼうに、女を出せ出せ言われて、いじめられた年寄りもおつたそうだが、カンカン叩いてね、警鐘が鳴ると、若い女は隠れて、男たちが棒を持って騒いで、まるで戦みたいだったよ。みんな気が立っていたから、夜は米軍物資を盗みに行つたりしてね。戦果をあげて、機械油（モービル）で、てんぶらを揚げて食べて下痢したりしてね。ささやかな結婚式やらお祝いごとのときは、必ず栄養にもならない機械油でてんぶらを揚げて、六斤罐と針金で造つた三味線を鳴らして歌を歌つたりしてね。さまざまな世の中だったよ。

旧那覇市